

詩集『鈴の音』より (3) ——イクバルのウルドゥー詩 (16) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、1903年3月1日、イスラーム擁護協会 (Anjuman-e Hīmāyat-e Islām) 第18回大会で発表されたムハンマド・イクバル (Muḥammad Iqbal, 1877-1938) のウルドゥー詩「真珠を振り撒く雲すなわち世界の御主^{おんあるじ}に対する恋心溢れる称賛の詩そして神に祝福された御方の御前におけるムスリム共同体の嘆き (Abr-e gauhar-bār ya'nī na't-e 'āshiqānah-e janāb-e sarwar-e kā'ināt wa faryād-e ummat bar āstānah-e ān dhāt-e bā barakāt)」の全訳である¹⁾。イスラームの預言者ムハンマドに対してインド・ムスリムの窮状を訴えかけるという興味深い内容の作品であるが²⁾、詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā)』には、「心 (dil)」という題名で詩のごく一部しか収録されていない (本翻訳では、詩集に収録された部分は斜体で示した)。

本詩はラホールの週刊新聞『祖国 (Waṭan)』に3回 (1903年3月6日、20日、27日) に亘って掲載されたとのことであるが³⁾、入手できない。それで、初出時とテキストに異同があるかもしれないが、翻訳には、1913年、ラホールの出版業者シャイフ・ムバーラク・アリー (Shaikh Mubārak 'Alī) が出版した詩集——作者イクバルの許可を得て出版すると表紙に記載されている——を用いる⁴⁾。他のテキストも参照し、重要な異同については註記した。

本詩は、「ムスリム共同体の嘆き (faryād-e ummat)」という題名で知られるようになったので——シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集の題名もそうになっている——本翻訳においてもこの題名を用いることとする。

【付記】 前回、本誌に訳出したウルドゥー詩「詩人」について。雑誌『宝庫 (Makhzan)』1903年12月号に掲載されたものと比較し、詩句に異同のないことを確認した。

* 大阪大学名誉教授

- 1) 「真珠を振り撒く雲」慈雨を齎す雨雲は慈悲の象徴。この詩ではムハンマドを指している。「恋心溢れる称賛の詩 (na't-e 'āshiqānah)」とは——ナアト (na't) はムハンマドを称賛する詩を意味する文芸用語——純然たる宗教詩ではなく、ムハンマドを現世の愛しい人のように見做した、恋愛詩のような宗教詩ということである。イスラーム擁護協会は、1884年、ラホールで設立された団体で、キリスト教の布教活動に対抗すること、ムスリムに教育を普及させること、ムスリムの孤児を救済すること、イスラーム関連文献を出版することを主な目的としていた。
- 2) ムハンマドに対してインド・ムスリムの窮状を訴えかけるという趣向は、1911年4月、イスラーム擁護協会第26回大会で発表された詩「不満 (Shikwah)」とよく似ている。「不満」では神に窮状が訴えられている (「不満」——イクバルのウルドゥー詩 (5)、本誌第5巻1-2号、2012年を参照)。
- 3) Gyān Chand, *Ibtidā'ī Kalām-e Iqbal ba-tartīb-e mah-o-sāl*, Karachi, 1988, p. 198. イクバルはイスラーム擁護協会の大会で発表する詩を前もって印刷し、大会時に小冊子として販売し、協会の資金としていた (Muhammad Hanif Shāhid, *Iqbal aur Anjuman-e Hīmāyat-e Islām*, Lahore, 1976, p. 74)。イスラーム擁護協会の記録には「この詩が詠まれた時も聴衆は寄付し、1部5ルピーする冊子も購入した。この注目すべき詩は数多く販売された」と書かれているようである (*ibid.*, p. 78)。本詩の発表時に販売された小冊子がある筈であるが、現在のところその所在は不明である。
- 4) ウェブサイト「レーフタ (Rekhta)」で見ることができる (<https://rekhta.org>)。

ムスリム共同体の嘆き

心の思いを口にせずにはいられようか
秘められぬ事を秘めることなどできようか
待ち望む目は言う——「終末の日よ、来たれ」と
泣いて終末の日の騒乱を引き起こさないでいられようか⁵⁾
「私」という存在があなたを私から隠してしまった
あなたに至るためにそれを消し去らずにはいられようか⁶⁾
ああ、神よ、会えない苦しみ——それはどれ程心地よいことか
素知らぬ顔もまたあなたの媚態——苦しまないでいられようか⁷⁾
愛の火よ、私が生きていられるのはおまえのおかげである
悲嘆の涙でおまえの焰を消すことなどできようか
存在という^{ルバーフ}弦楽器の弦よ、おまえは多くの曲を秘めている
恋の義爪^{つめ}でおまえを掻き鳴らさないでいられようか
私には忍耐する力がなく、「沈黙」も助けてはくれぬ
ああ、この愛の苦しみを隠すことなどできようか
秘めるべきであるのに口から洩れ出てしまうのである
古い酒が心の酒壺から流れ出てしまうのである

私が燃え上がったなら、天よ、消してはくれまいか
私は貧者の墓に灯された蠟燭のようなものである⁸⁾
私は薬を求める病人である
しかし苦しみはこっそりとう言うのである——「私が薬である」⁹⁾
よいか、花を手折る者よ、私の姿に欺かれてはならぬ
咲き誇る薔薇のように見えているだけである
私にとって儂い人生など死と同じである
だからその名を聞くと私は逃げ出してしまうのである
私は或る宴から遠く離れて生きている
生きていると言えるであろうか——私は後悔の念に苛まれている¹⁰⁾

5) 最後の審判の日には大騒乱が生じるとされている。最後の審判の日になれば神に謁見できるので、大きな泣き声で最後の審判の日を招来し、神にまみえたいということ。

6) 「あなた」神を指す。

7) 会えない苦しみに喜びを感じるというのはウルドゥー詩の一般的なモチーフである。

8) 誰もいないところで灯っても仕方がないということ。

9) ガーリブ(Ghālib, d. 1869)の有名なウルドゥー語ガザルの以下の詩句を踏まえていると思われる。

水滴の飲びとは大海に滅し去ること

度を越した苦痛は治療薬となる

(水滴は大海と交わりと消滅してしまう、苦しみが度を超すと死んでしまい、苦しみは消える。)

10) 「或る宴」愛しい人の宴ということ。ここでは神の宴を意味する。

恋は私を隠棲の場から外に連れ出した
 それこそ私に自慢できることである
 心の傷は太陽のように明瞭である
 しかしそれはもっと明瞭になりたいと望んでいる
 説教者よ、自己抑制の話など他の者にするがよい
 溢れ出る私の涙がこう言っている——「私は嵐である」
 この私を理解するのは困難である
 しかし理解しようと思うなら、理解するのは容易である
 遊蕩者は私を聖人と呼び、聖人は私を遊蕩者と呼ぶ
 両者の言葉は私を仰天させる
 狭量な禁欲者は私を異教徒と見做し
 異教徒は私をムスリムと見做す
 イクバルはスーフィーのような人物であると言う者もいれば
 イクバルは美女に魅せられた者であると言う者もいる
 目の前にいるのに私はあれこれ言われている
 私が立ち去ったら人は何と言うであろうか
 敵意ある眼よ、私を蔑視しないで欲しい
 私は創造主ですら誇りとするような人間である
 私が得たのは恋の焔で焼け果てた畑
 「苦しみ」が尊敬して止まない心——それが私の心である

絞首台と縄の物語など心にとってはお伽噺に過ぎぬ
 「お姿をお見せください」という願いこそ心の物語の表題である¹¹⁾
 おお、神よ、この盃に酒が満ち溢れればどうなるのであろうか
 心という盃に付けられている横線は永久に至る道筋¹²⁾
 おお、神よ、恵みの雨雲のおかげであったのか、恋の稲妻のおかげであったのか
 存在の畑が焼け、心という種が発芽した
 美の貴重な宝物を見出せたであろうに
 ファルハードよ、おまえは心の荒地を掘り返さなかった¹³⁾
 天上界ともカアバ神殿とも思える
 神よ、心という私の館は一体誰の館なのであろうか
 この世で自由を味わうのは
 心という妖精の館の鎖に繋がれた者である

11) この連が2詩句削除の上、「心」という題名で詩集『鈴の音』に収録されている。
 「絞首台と縄の物語」922年、スーフィー、ハッラージ (Hallāj) が異端の罪によりバグダードで絞首刑に処されたことを指している。
 「お姿をお見せください」シナイ山でモーセが神に言った言葉 (コーラン、高壁の章、143節)。

12) 「酒」神に対する愛を意味する。

「横線」酒量を量るために盃に付けられた横線。詩集『鈴の音』では「永久に至る道筋 (jādah-e rāh-e baqā)」の部分
 が「永久の国に至る道筋 (jādah-e mulk-e baqā)」となっている。

13) 「ファルハード (Farhād)」ホスロー (Khusrau) 王とシーリーン (Shīrīn) 姫の恋愛物語の登場人物。岩山を穿って運河を通したならばシーリーンを与えようとホスローに言われ、ファルハードは手斧で岩山を穿った。

心には心の狂気があり、私には私の狂気がある
心は誰かに狂い、私は心に狂う¹⁴⁾
おお、無知な禁欲者よ、おまえは理解していない
心に酔った者のよめきには百もの礼拝も敵わないということ
ああ、心の館の主の様子など解るであろうか
マンスールですらその館の門番に過ぎないのである¹⁵⁾
一塊^{ひとかたまり}の土を錬金薬にしてしまうような
そのような力を心という蛾の焼け焦げた死骸は持っている¹⁶⁾
恋の網に掛かってこそ心は解放される
雷に打たれてこそこの木は緑となる

他者を愛してこそ自分を理解することができる
心を奪われてこそ目は開く
世間は狂気を悪く言うが
鎖に繋がれて初めて私は悟ることができたのである¹⁷⁾
心は果たされぬ願いを嘆き、己の身を嘆く
一体何を得たのか、心に聞いてみるがよい
私の視界を覆っていたのは「私」という存在であった
「私」は宴の帳であるかのように宴から取り除けられた
存在を滅却することこそ真に存在することである
存在は虚偽^{しるし}の点となり、私に真理を示してくれた¹⁸⁾
心よ、被造物は理解できるが創造者は感得されなければならない
愚か者よ、己を捨ててよく見るがよい
モーセよ、シナイ山であなたが見たもの
それをカイスは駱駝の背の輿の中に見た¹⁹⁾
何と言えよいのであろうか、恋による自己消滅に如何なる喜びがあるか
禁欲者よ、おまえは自己を消し去って喜びを感じたことがない
私は恋の道を歩み、時には倒れ
時には波となり、時には砂浜の砂となる
殺されるとき、私は短刀の刃に身を預けるのである

14) 心は神に魅せられ、そのような心には私は魅せられているということ。

15) 「マンスール (Maṣṣūr)」 ハッラージのこと。ハッラージのような優れたスーフィーですら心の館の中に入らず、館の主に出会うことができないのに、館の主のことなど我々に解るであろうかということ。

16) 蛾は求愛者の象徴。蛾燭の炎に恋い焦がれ、焔に飛び込んで焼け死んでしまう。「一塊の土」とは人間のこと。

17) 狂気(愛)に捕らわれて、理解する力を得たということ。狂人は鎖で縛られる。

18) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集では、「点」は nuqṭah と表記されているが、nukṭah と表記しているものもある (Ghulām Rasūl Mihr and Šādiq ‘Alī Dilāwarī, eds., *Sarōd-e Raftah*, Lahore and Karachi, 1959, p.45)。前者は dot、後者は point という意味である。

19) カイス (Qais) はライラー (Lailā) とマジヌーン (Majnūn) の恋愛物語の登場人物。ライラーを恋するあまりカイスは狂人(マジヌーンは魔物^{じま}に憑りつかれた者、狂人の意)になってしまう。世間体を気にしたライラーの父親はライラーを他の男と結婚させてしまう。ライラーは駱駝の背に取り付けられた輿に乗り、婚家へと向かった。

殺人者^{いとしいひと}の煌めく短刀の輝きとなって²⁰⁾
 私は旅人である——目的地の場所が分からなければ
 私は道標のように消えてしまうのである²¹⁾
 恋の傷は二つの世界を輝かせる
 欠けることのない満月となって²²⁾
 恋慕う目に姿を見せてくれないのはどうしてか
 会うのにふさわしくなってから宴に來いということか
 神よ、ああ、恋の矢は恐ろしい
 射殺^{いころ}される鳥のように私の心は震えた
 叡智の酒によって心の鉢が満たされるようにと
 私もまた托鉢者となってあなたの道に歩み出た²³⁾
 救いの手を差し伸べて欲しい、メッカの主、アラビアに住まう者よ
 身も心もあなたに捧げよう——あなたの呼称は素晴らしい²⁴⁾

 財産を失うこと——それは多くを得ることである
 心が乱れることによって私は安らぎを得る
 心にあなたに対する熱い思いがなければ
 人が人となるのは難しい²⁵⁾
 ムスリムとなること——それは愛に殉じる土地に足を踏み入れることである
 簡単なことであると人は思っているが
 愛によって荒廃した心は豊かになることができた
 この城塞にとって荒廃とは建設の手段であった²⁶⁾
 知識の街が持つ魅力には惹かれるが
 無知であることに私はどれほどの欲びを感じていることか
 あなたはヤスリブでウワイスに会わず
 モーセの眼前で稲光となった²⁷⁾

20) 愛しい人の手に掛かって死ぬのは求愛者至上の欲びであるとする考え方がある。

21) 道標の文字が時間が経つと消えてしまうように自分も消えてしまうということ。

22) 「二つの世界」この世とあの世。光り輝く恋の傷を満月と表現している。

23) 「あなた」ムハンマドのこと。

24) ムハンマドへの呼びかけ。ムハンマド・ジャーヌ・クドゥスイー (Muhammad Jān Qudsī) のペルシア語の詩句を一部改変して引用している (ジャーヌ・ムハンマド・クドゥスイーと表記する文献もある)。Jan Marek に拠れば、クドゥスイーは 1583 年頃マシュハドで生まれ、1646 年にスリナガルで死んだペルシア語詩人である (Jan Marek, "Persian Literature in India" in Jan Rypka ed., *History of Iranian Literature*, Dordrecht, 1968, p. 727)。Annemarie Schimmel のムハンマド研究書 *And Muhammad is His Messenger: The Veneration of the Prophet in Islamic Piety*, Chapel Hill and London, 1985 にはこの詩句に言及した箇所がある (208 頁)。本書の人名索引では、この詩人の名は、Qudsī Mashhadī, Jān Muḥammad (d. 1656) となっている (363 頁)。本書には、The Names of the Prophet という、ムハンマドの呼び名に関する章がある。

25) ガーリブの以下の有名なウルドゥー語ガザルの詩句の後半句を引用している。

何事も難しい
人が人となるのは難しい

26) イスラーム擁護協会の記録には、「この城塞 (qaṣr) にとって」の部分が「この清貧 (faqr) にとって」と記されているようであるが (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 159)、誤記ではないかと思われる。

27) 「ヤスリブ (Yathrib)」メディナのこと。

「ウワイス (Uwaith Qarani, d. 657)」イエメン在住のムスリム。ムハンマドに会いたいと切望していたが、叶わなかった。あなたは姿を見せないこともあれば見せることもあるということ。

神の近くにいるのに神の僕^{しもべ}であると言ひ
簾を上げるかと思えば、姿を隠す……²⁸⁾
喜ばしいことである、あなたへの愛にこの身を消し去り
アラビアのそよ風への愛そのものと化するの
我がイスラーム、我が信仰とは
あなたの頬を見て驚嘆することである
あなたはアブラハムの希望の朝の破顔^{おとずれ}であり
文字ミームが生み出す不思議の館の作り手である²⁹⁾

終末の日、真珠を振り撒く、仲立ちの雲が現れた
見よ、行状という商品よ、おまえの買い手が現れた³⁰⁾
原初的美が恋の衣を纏い
ヤスリブに自分自身の買い手となって現れた³¹⁾
私が最後の審判に行くときこう声がした
「見よ、あの信心深い異教徒が現れた」
真の愛する欲びは「誰か」を愛するときにはか得られない
私の心はあれこれ愛してきたが³²⁾
恋の懊悩のせいで私の襟元には
見ると糸1本残っていない³³⁾
恋路には行く先々に見るべきものがある
ナジュドの砂漠があり、エジプトの市場がある³⁴⁾
私は天上の楽園をいくつも捧げた
ヤスリブの砂漠で足に刺さった1本の棘に³⁵⁾
終末の日、「執り成し」はどれほどの禍を取り除いてくれたことか
冷や汗に身を沈めたこの罪人^{わたし}が現れたとき³⁶⁾
私の罪の意識、あなたの執り成し
ああ、その慈しみにどれほど深く感じ入ったことか
あなたへの愛の酒を売る酒場は驚嘆すべき酒場である

28) 神の近くにいるにもかかわらず——神的存在であるにもかかわらず——自分は神の僕であるとムハンマドが言うので、ムハンマドの本質が何であるのか、誰にも解らないということであろう。

29) 「アブラハムの希望の朝の破顔」とは、自分の子孫の中から使徒が現れて欲しい、そして人々を正しい信仰に導いて欲しいというアブラハムの希望が、ムハンマドの登場によって叶ったことを意味しているようである(コーラン、雌牛の章、129節を参照)。ムハンマドの別名アフマド(Ahmad)はアラビア文字アリフ、ヘー(ハー)、ミーム、ダールの4文字で構成されるが、ミームを除くと、アハド(ahd 唯一者すなわち神)と読める。第2半句は、文字ミームがムハンマドの本質、ムハンマドが神的存在であることを隠していることを表しているのではないかと思われる。

30) 最後の審判の日、ムハンマドは調停者として人と神との仲立ちをすると信じられている。

31) 神(原初的美)が自分自身を恋する者、神自身の買い手となり、メディナにムハンマドの姿となって現れたという意味であろう。

32) 「誰か」ムハンマドのこと。

33) 恋に苦しむ者は苦しみのあまり上着の襟元を引き裂いてしまう。

34) 「ナジュドの砂漠」ライラーと結ばれなかったマジュヌーンはナジュドの砂漠を彷徨した。「エジプトの市場」ヨセフはエジプトの市場で奴隷として売られた。

35) 天上の楽園よりもムハンマドの町であるヤスリブ(メディナ)の方が麗しいということ。

36) 過去形になっているが、最後の審判の日のムハンマドによる執り成しを期待している。

私は素面でそこに行き、酔い痴れて戻ってきた
「私たちはあなたを知らない……」という言葉があなたの偉大さを隠してしまった
しかし神との近さからあなたの本質は明白である³⁷⁾

愛の大波が私を連れ去った
あらゆる波が私にとってはノアの箱舟である³⁸⁾
あなたの美しさがこの目に焼き付いてからというもの
月や星の輝きなど闇としか思えない³⁹⁾
おお、恋の酒場の酌人よ、あなたに身を捧げよう
私は1杯の酒を頼んだのに、あなたはいくつもの酒甕を与えてくれた⁴⁰⁾
あなたを愛して土となり、頂点を極めることができた
「天使たちは私を清めの土として用いたのである」⁴¹⁾
土埃のように私はあなたの裾にしがみ付いている
終末の日が来ても私を忘れないで欲しい⁴²⁾
あなたを恋する者の気概を見て欲しい
その者は天女にこう言うのである——「私に構わないで欲しい」⁴³⁾
ヤスリブの街角で死が訪れたなら
たとえイエスが「立て」と言っても私は立ち上がらない⁴⁴⁾
あなたに会えない夜——棘のように
星の眼差しが私を刺し貫いている
私は常に恐れている——ヤスリブの道から
妄想が私をシナイ山に連れて行くのではないかと⁴⁵⁾
あなたは目配せで私の心を静めてくれた
終末の日の騒乱は美しい歌声となった
私にはあなたに言いたいことがある
話す力が消えなければよいのであるが

37) 「私たちはあなた (= 神) を知らない、当然知っていなければならない程度にすら」とムハンマドが述べたというハディースがある。

38) 愛の大波に飲まれたいということ。

39) イスラーム擁護協会の記録には、「あなたの美しさが (husn tērā)」の部分が「誰の美しさが (husn kis kā)」と記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 160)。その場合は以下のような訳になる。

誰の美しさがこの目に焼き付いているのであろうか
月や星の輝きが闇としか思えなくなってから

40) 酌人は愛しい人を意味する。

41) 「土となり」死んだということ。

「清めの土」水がない時、ムスリムは土で身を清める。第2半句は、ダーグ (Dāgh, d. 1905) のガザル詩集『ダーグの花園 (Gulzār- Dāgh)』に収められたウルドゥー語ガザルの以下の詩句からの引用。

アイマンの谷よ、私を見るがよい——私は土である
天使たちは私を清めの土として用いたのである

(アイマンの谷はモーセが神の声を聞いた、シナイ山の谷)

42) 執り成しを期待している。

43) 天国の美女よりもムハンマドの方が麗しいということ。

44) イエスは死者を蘇らせることができたとされている。

45) ヤスリブすなわちメディナはムハンマドの町であり、シナイ山は神の光が現れた山であるので、ムハンマド (ヤスリブ) と神 (シナイ山) とを混同するのを恐れるという意味ではないかと思われる。

ムスリム共同体の現状を嘆く必要がある
恋の陶醉よ、まだ私を消さないでもらいたい
私は悲しみに満ち、破滅の哀しみに囚われている
私は時の虐げに呻き苦しんでいる

大洪水のときにノアの支えであった者よ
火中のアブラハムが支えとした者よ⁴⁶⁾
暗黒の世界の松明であった者よ
その影を天上界の目の輝きとした者よ
その手の光が月の光であるような者よ
その指示によって月を月とした者よ
あなたの美しさは幾重にも覆われているが
「もしおまえがいなければ……」の言葉はあなたの位階を示している⁴⁷⁾
モーセはその輝く手を自慢していたが
あなたの足跡は何度も神の顕現の場となった⁴⁸⁾
存在の目は盲人の目のようになっていたであろう
「成れ」の目の中にあなたの光が含まれていなかったなら⁴⁹⁾
救世者の到来は否定しない
しかしあなたに匹敵する者が現れることはない⁵⁰⁾
何と言えよいのであろうか、ムスリム共同体の有様について
我々を破滅させた禍について

ムスリム共同体の状態が良かろうと悪かろうと
鏡のように包み隠さず述べることにする
説教者たちは高慢である——ああ、神よ
自分の言葉を神の声と言っている
彼らは俗益を求めて躍起になっている
説教ではこの世を罵っているにもかかわらず
よそ者に対しても賞賛を惜しむべきではないのに
彼らは身内すら罵倒して憚らぬ
あなたの花園に党派主義の風が吹いたのに
彼らは愚か——それを朝のそよ風と呼んでいる
(争いの剣で民を愛する者の血が流されたのに

46) ムハンマドに呼びかけている。

47) 「もしおまえがいなければ私は世界を創造しなかったであろう」と神はムハンマドに語ったという。

48) 「モーセはその輝く手を……」 モーセが袖から腕を出すとその腕は白く輝いていたという(コーラン、詩人の章、33節)。シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集には、「あなたの輝く手 (yad-e baizā tērā)」となっているが、「輝く手を (yad-e baizā par)」の誤記であろう。

49) 神の「成れ」という言葉で世界は創造されたが、その中にムハンマドの光があったということ。

50) 救世者 (mahdī) イスラームには、乱れた世界を正すために救世者が現れるという信仰がある。

ああ、何たる無知——彼らはそれを^{ハシナ}指甲花の染料であると言っている⁵¹⁾
 ああ、終末の日のような騒乱を起こす言葉を
 彼らは争いを収める言葉と呼んでいる
 (おお、隊商の指導者よ、これはあなたの共同体ではないのか
 インドで隊商が襲われたと人々は言っている)⁵²⁾
 金銭目当ての信仰しか持っていない者たちなのに
 騙されて人々は彼らを指導者と呼んでいる
 数多くの民を世界から消し去った偏見
 それを彼らは館の明かりと呼んでいる
 彼らは内部対立を信仰の基礎と見做し
 死の病であるのにそれを薬と呼んでいる
 (これはキリスト教徒の神、あれはシーア派のアリーと呼び
 ああ、彼らは尊い存在をどれほど貶めていることか)⁵³⁾
 「あなたの肉は私の肉」という言葉の意味に彼らは口を出す
 これはあなたを悪く言うのと同じである⁵⁴⁾
 おお、終末の日の調停者よ、あなたが愛する者たちはこのようになってしまった
 私のような者は、さて、彼らに何と言われていることであろうか⁵⁵⁾
 宗教的な敵対心の裏には個人的な敵意がある
 宗教の陰に隠れて彼らは何を為し、何を口にしていることか⁵⁶⁾
 仲間への挨拶は不要と信じる者たち——
 このような者たちを彼らは「敬虔な者たち」と呼んでいる⁵⁷⁾
 民を愛するあまり自分の屍衣の心配すらしないう者を
 彼らは名誉欲の奴隷と呼んでいる
 (治療というのがこの世界から消えることを意味するものでなければいよいよであるが
 苦しみが度を越すことが治療であると彼らは言っている)⁵⁸⁾
 愛するライラーにどうして会えようか
 私の^{ハシ}運命はカイスの燃え尽きた^{ハシ}運命と同じである⁵⁹⁾

 名士たちは私の言うことを聞こうとしない

-
- 51) 指甲花染料は赤い。シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 160)。
- 52) 「隊商の指導者」ムハンマドのこと。シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 160)。
- 53) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 160)。
- 54) 「あなたの肉は私の肉」ムハンマドがアリーに言ったとされる、アリーとの親密さを表す言葉。この言葉を、あなたの物は自分の物だという意味に捻じ曲げているということ。
- 55) 「終末の日の調停者」ムハンマドのこと。
- 56) 宗教心に発する敵対心は、言わば公憤であるが、個人的な敵意は私憤、私怨である。
- 57) 原詩では「敬虔な者たち (ṣalāhā)」には引用符が付けられている。何か特別な意味があるのかもしれない。
- 58) この詩句も註9)で記したガーリブのウルドゥー語ガザルの詩句に基づいている。シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句は見られないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。
- 59) カイスはライラーと結ばれなかった。

それであなたに訴えなければならなくなった
私が黙っていたのはそれが礼儀であったからである
いつでも訴えることはできたのであるが
苦しむ者たちの姿が目に入らないことがあろうか
私の沈黙もまた一つの言葉であった
嘆きは時には口を頼り、時には目を頼る
私の「言う」は「泣く」であり、「泣く」は「言う」である
富裕な者たちは民を民とすることができる
彼らが正道を歩んでくれれば言うことはない
彼らは安楽の酒に酔い痴れている
あなたの指示を忘れ、神の言葉を忘れ
私は何度も言った——「民は苦境にある」と
それでも彼らは私の言うことを聞こうとしない
(思っていることを私が口にするとう言う者がいるであろう
「この者たちは満足することを知らない」)⁶⁰⁾
(彼らは気にも留めないが、言いたいことは言い続けなければならぬ
もし「誰か」が言え、その言葉にはどれほど効き目があることか)⁶¹⁾
(あの宴に行くことができるのは
宴で冗談を言える者たちだけである)⁶²⁾
この者たちは貧しい者を不快に思っているが
二つの世界の支配者であったのにあなたは清貧を誇りとしていた⁶³⁾

このように哀れな状態ではあなただけが私の救いである
困り果てて私は嘆きをつい口にしてしまった
このような状態でも私の希望は消えたりしなかった
あなたの名を受け継いでいるから、あなたに従っているからである⁶⁴⁾
指導者たちは党派主義によって状況を悪化させてしまった
ああ、この庭師たちは庭園を荒らしてしまった
(私は存在の街から消えてしまうが
私の呪いが彼らに降りかかるに違いない)⁶⁵⁾
(あなたの前でどうして仲間の非難などできようか

60) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。

61) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。前半句は以下のようにも訳せる。

私が何か言うと彼らは「消える」と言うが

62) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。

63) 「清貧は我が誇り」とムハンマドが述べたというハディースがある。二つの世界とはこの世とあの世のこと。

64) ムスリムであるからということ。

65) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。

困ったときには仲間ですら他人になってしまうのである)⁶⁶⁾
 私はいくつもの友愛の手段を編み出したが
 仲間は仲間とならず、他人も仲間とはならなかった
 おお、ノアの箱舟を救った者よ
 偶有^{わざわい}の渦に私の船は巻き込まれてしまった⁶⁷⁾
 事ここに至ってもあなたが私の話を聞いてくれないのであれば
 一体誰に聞いてもらえばよいのであろうか
 さあ、恵みの雨雲よ——雨を降らせよ、遅れてはならぬ
 遅れれば存在していないのと同じである
 大事なものは民の畑が潤うことである
 私の涙が川のように流れ出そうとしている
 禍の雲がもくもくと湧き出している
 私の焦がれる心はあなたを探し求めている
 私の苦境があなたに見えていない筈はない
 しかしろうたえてあなたに窮状を訴えてしまった
 おお、アブラハムが誇りとする者よ、私はあなたのおかげで生きている
 神に祈って欲しい、私の生存が脅かされている
 最早私にはこの宴しか残っていない
 この人たちの勇気にしか頼れない
 苦悩の物語は長い——何とあなたに言えばよいのであろうか
 弱者たちはあなたの支援を待っている

民を癒す薬とはどのような薬なのであろうか
 この花園を緑とするそよ風とはどのようなそよ風なのであろうか
 現世来世の名誉を齎す祈りとは
 おお、審判の日の調停者よ、それはどのような祈りなのであろうか⁶⁸⁾
 教えて欲しい、ムスリム共同体が一つとなるような
 忠節の果たし方とは一体どのような果たし方なのであろうか
 教えて欲しい、滴^{しずく}一滴一滴が協調を齎す効き目を持つような
 そのような陶醉を齎す酒とは一体どのような酒なのであろうか
 私の隊商を目的地に送り届ける駱駝とは
 どのような駱駝なのであろうか、その鈴の音はどのような音がするのであろうか⁶⁹⁾
 私の泣き声には最早力が残っていない
 民の心を溶かす泣き声とは一体どのような泣き声なのであろうか
 この世では誰もが財力に頼って生きている

66) シャイフ・ムバーラク・アリーが出版した詩集にはこの詩句はないが、イスラーム擁護協会の記録には記されているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。

67) Gyān Chand や Ghulām Rasūl Mihr & Sādiq ‘Alī Dilāwarī の前掲書では、「私はいくつもの友愛の手段を編み出したが……」の詩句が「おお、ノアの箱舟を救った者よ……」の後に来ている。イスラーム擁護協会の記録では、上に訳出した順序になっているようである (Muhammad Hanif Shāhid, *op. cit.*, p. 161)。

68) Gyān Chand や Ghulām Rasūl Mihr & Sādiq ‘Alī Dilāwarī の前掲書では、「祈り (du‘ā)」が「薬 (dawā)」になっている。

69) 「鈴」駱駝の首に付けられた鈴。

しかし私にはあなた以外にどのような希望があるであろうか
おお、恵みの雨雲よ、私の畑が荒れようとしている
雨雲あなたを運んできてくれるような風とは一体どのような風なのであろうか
支配力ちからを秘めた貧者たち——
そのような者たちの宴とは今日一体どのような宴なのであろうか
有難い——あなたは或る宴について教えてくれた
私が「友愛の基礎とは一体何であるのか」と聞いたとき⁷⁰⁾
この素晴らしい宴に至る道を人々に指し示して欲しい
全ての人がこの宴に夢中になるようにして欲しい

70) 「宴」 イスラーム擁護協会のこと。